
ストライクウィッチーズs s 芳佳&トゥルーデ

やすお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズs 芳佳&トゥルーデ

【Nコード】

N8113N

【作者名】

やすお

【あらすじ】

2回で一気に終わる読みきり小説です。

しかし、次の更新はいつになるかわかりませんwwでも、1週間以内に投稿する予定です。

この後もストパンス書き続けます。

芳佳&バルクホルン 道のり1/2

「たっ、た確か、宮藤、明日は、やつや休みだったよな…？」

夕食の片付けも終わった時、急にバルクホルンさんから声がかかった。

「はい、明日は休みです・・・けど、なんかあ・・・」

「なっ、なら、朝9：00に談話室に、きてくれ！」

「はい、わかり・・・」

返事をする前にバルクホルンさんは行ってしまった。ただ、話している時のバルクホルンさんはとても・・・可愛かった。年上の人なんだけど。

「何かあったの芳佳ちゃん？」

とリーネちゃんが聞いてきたので、明日バルクホルンさんと出かけるんだと言ったら

凄く、機嫌が悪かった。なんでだろう？

その後、私は無意識にも鼻歌を歌っていたのか、すれ違ったペリー又さんに、

もの凄く不思議がられた。

でも、明日は何するんだろうな〜とベットの中で考えていたうちにいつの間にか寝てしまった。

明日は・・・バルクホルンさんと・・・

翌朝、朝食をリーネちゃんと作っていたら、まだ機嫌が悪いみたい。朝食後、洋服を選ぼうと思ったが、結局はいつもの扶桑国海軍の水

兵服で行くことにした。

談話室に着いたのは15分前だった。しかし、そこにはバルクホルンさんがすでに座っていた。

バルクホルンさんはなんだか緊張した面持ちだった。なので、とりあえず話しかけることにした。

「おはようございますっ!」

「あわあああっ、おはよう。」

「すいません、待たせてしまいましたか?」

「いや、そんなことはない。とっ、とにかくいこうか。玄関で待っていてくれ。」

玄関でバルクホルンさんをまちつつちょっと考え事をしていた。今日のバルクホルンさんは

普段よりも、きれいでなにかのいい香りがしたなあ〜（普段からおもっているのではあるが）と。

しかし、そんなことを考えていたからなのか、バルクホルンさんがキューベルワゲンを

まわしてきても、ぜんぜん気づかなかった。

「お〜い、大丈夫か宮藤?」

「はわっ。」

「これはっ!?!」

「どうしました?」

「なんでもない。なんでもないぞ。」

なんか、今日のバルクホルンさんは可愛いな〜・・・おっと危ない危ない。

「ところで、今日はどこへいくんですか?」

「え、えとだな・・・、その、クリスの看護婦の先生から良いコンサートをやっていると

聞いたので、そ、それで宮藤を・・・」

「そ、そうなんですか・・・嬉しいです!」

「そうか。よかった。」

2人を乗せたキューベルワーゲンはロンドンへと向かう。

途中で芳佳を眺めてしまったバルクホルンが、交通事故を起こしそうになったのは、

また別の話である・・・

1時間車で走り、その後は徒歩だった。

「さて、たぶん・・・ここだな」

バルクホルンさんが案内してくれたのは、小さなホールだった。

芳佳&バルクホルン 道のり1/2（後書き）

なんとなく、バルクホルンと芳佳が好きな作者やおがお送りします。

この後に某巨大掲示板にも投稿する予定です。

芳佳&バルクホルン 道のり2/2 (前書き)

前回、道のりの続編です。

芳佳&バルクホルン 道のり2/2

室内は開演前という事で、まだ明るかった。しかし、たくさんの人達がコンサートを観に来ていた。それは、この戦時中での、数少ない娯楽だからだろう。

飲み物を購入（バルクホルンさんのご馳走でした♪）してから、私達は席に座った。

「宮藤はコンサートは初めてか？」

「はい。扶桑では紙芝居位しか見たことないです。」

「そうか。あれは外でやる物だな。この後、暗くなるから怖くなったら私に言えよ。」

微笑みながら、バルクホルンさんは私にそう言ってきた。

その、微笑みがあまりにも優しい笑いだっただため、少し・・・

「怖くなんてならないですっ！」

だって・・・バルクホルンさんが隣にいるんだから・・・とは、言えなかった。

その後も、他愛もない会話をしていると、コンサートが開演した。

コンサートで歌われる曲はどれもいい曲ばかりだった。最後は観客達が全員立って拍手を送っていた。

ホールから出ると、もう外は太陽が落ちはじめていた。ミーナ中佐からの外出許可は午後10時までと言われていたので、まだ時間に

余裕がある。この後はどうするのだろうか？

そこで、バルクホルンさんが口を開いた。

「この後、どうしても・・・行きたい場所があるんだ。一緒に来てくれるか？」

「はい。よろこんで。」

正直、バルクホルンさんがどうしても行きたい場所というのは、どこなんだろうかと

非常に気になった。しかし、車に乗った途端に眠気が襲ってきた・

・
――藤く宮藤くおい。おきろく宮藤く

この声はバルクホルンさんだく・・・2人で出かけていたのに寝てしまった。折角の

バルクホルンさんとの2人の時間がっ！

「宮藤。起きたか？起きたら車から降りてみる。」

「ふあゝい。」

車から降りると、水平線の見える丘だった。それも、太陽が沈む直前の。

「うわあゝ。きれいですね。」

「ああ。ここは哨戒任務をしているときに偶然見つけたんだ。」

「そうだったんですか。でも、いいところですね。」

「ああ、そうだな。私は休みのにはここで夕焼けを見ることが好きなんだ。宮藤は

夕焼けは好きか？」

「はい。私も夕焼けは大好きです。赤くてとてもきれいですし。」

「そうか。それは良かった。・・・なあ、宮藤。ひとつ話があるん

だ。」

そこで、バルクホルンさんは私の方に向き直り、一言、言った。

「好きだ宮藤。」

「はい。なんですか？……ってえええっ！！？」

あまりにも、急にだったために気が動転してしまった。こういうときは

素数を数えよう。1・2・3・5・7……よし、落ち着いた。落ち着いたから、バルクホルンさんの告白に私も答えなければいけないよね。

「……どうだ、宮藤？」

「私も。私も、バルクホルンさんのことが好きですっっ！！！」

「……本当か！？。」

「はいっ！！！」

「良かった。私は今、すごく嬉しい。」

「私です。バルクホルンさん。」

「なあ、宮藤。」

「なんですか？」

私を呼んだバルクホルンさんは、後ろの夕焼けにも負けなくらいに、真っ赤だった。

そのバルクホルンさんは、私の両肩を持って

-
-
-
-
-
-
-
-
-
私にキスをした。

芳佳&バルクホルン 道のり2/2（後書き）

なんとな〜く書いてみました。あとは番外編を書いてみようかと思っ
ています。

ちなみに、アニメ版ストライクウィッチーズ2は最後に宮藤が魔力
を失って

しまうんですが、あまりにも納得がいかなかった（個人的に宮藤が
好きで飛んで欲しい）のでアフターストーリーを次に書く予定です。

最後まで読んでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8113n/>

ストライクウィッチーズs s 芳佳&トゥルーデ

2011年1月7日21時11分発行